

うずめられた鏡

小川未明

青空文庫

後^{のち}になつてから、烏帽子岳^{えぼしだけ}という名^ながついたけれど、むかしは、ただ三角^{かくがた}形の山^{やま}とし
か、知^しられていませんでした。山^{やま}がはじめで、地上^{ちじょう}に生^うまれたとき、あたりは、荒^{こうりよ}
涼^うとして、なにも、目^めにとまるものがなかつたのです。

そのとき、はるか北^{きた}の方^{ほう}に、紫^{むらさきいろ}色^{いろ}の光^{ひか}る海^{うみ}が見^みえました。

「あれは、なんだろう。」と、山^{やま}は思^{おも}いました。この大自^{だいしぜん}然^{ぜん}について、なにも知^しらな
つた山^{やま}は、日^ひがで^でて、やがて日^ひの暮^くれるまでの間^{あいだ}に、いくたびとなく、かわる海^{うみ}の色^{いろ}を見^み
て、ふしぎに感^{かん}じたのです。しかし、からだのうごかされぬ山^{やま}は、ただ、いろいろと、自^し
然^{ぜん}を空^{くう}想^{そう}するばかりでした。

「どうすれば、あすこに、いくことができるだろうか。」

そのとき山^{やま}は、大^{おお}きな風^{かぜ}がふいて、自^じ分^{ぶん}をうごかしてくれはせぬかと思^{おも}いました。しか
し、かつてそんなような、大^{おお}きな風^{かぜ}のふいたことがありません。こうして、ひとりぼつち
でいる山^{やま}は、そのころ、海^{うみ}だけが、なんだか自^じ分^{ぶん}と運^{うん}命^{めい}を一つにするような気^きがして、
どうか、おたがいに、知^しり合^あいに、なりたいたねがいました。

大^{おお}空^{ぞら}をあおげば、星^{ほし}が毎^{まい}夜^よのごとく笑^{わら}つたり、目^めで話^{はな}をしたりしますけれど、山^{やま}はも

つと身近に、友だちを持ちたかつたのでした。

ある日、海の色が、とりわけ、きれいにさえて見えたのです。山は、なにか海が、自分にあいずをするのだと思ひました。だから、自分もわらつて答えました。そして、その日から、二人はいくらか、知り合いになつたという感じがしました。

なにごとにやらず、こうありたいと、熱心に仕事をすれば、いつか、かならず成功するものです。人間が遠くから、たがいに話が出来るようになったのも、電氣を發明したからで、やはり自然の大きな力を、知つたからであります。

谷からわき上がる雲が、自由にうごけるところから、山は雲を使い、たててゐることを、考へつきました。そして、あるときは、山から海へ、また、あるときは、海から山へと、雲は往来したのでした。

海の上では、波があつて、波はなぎさへおしよせて、岩にくだだけ、しぶきは玉のごとくとびちり、遠い水平線は、縹渺として、けむるようにかすみ、白い鳥が、砂浜で群れをなしてあそんでいるのを、雲は山へかえると、おもしろく話しました。

また山では、おしげる木々に、あらしがおそうと、はげしく枝と枝をもみあい、そして、頂上から落下する滝が、さながら雷のとどろくように、あたりへこだまするもの

すごい光景を、雲は海へいつて聞かせることもありました。

こうして、白い雲は、南方の高い山から、うごきはじめて、北の海のほうへ流れているのであるが、途中、ゆらゆらと平野をいったとき、そこそこに、百姓のすむわらぶきやがあつたり、畑をたがやす男女や、馬や、牛や、犬などの姿が、ちらちらと見えまして。

こんもり木立のしげるところに、丹塗りの社があつて、その前に、人がひざまずいて、よく祈願をこめていました。ちょうどこのとき、男は、神さまにお礼をいつているのでした。

「神さま、よく私を人間として、生まれさせてくださいました。もし、そうでなかったら、私は毎日、くるしいめにあつて、なぐられたり、追いまわされたりしなければならなかったでしょう。それをおかげで、牛や、馬をつかつて、楽に仕事をして、暮らすことができます。これというのも、人間に生まれさせてくださった神さまの、おかげであります。」と、もうしていました。

この男が去ると、つぎに社の前へきてすわったのは、まだ若い女でありました。彼女は、熱心に手をあわせ頭をひくくたれて、ねがつていました。彼女

「いま私は、七人の男から、結婚をもうしこまれていますが、私の心の中で愛する男は、その中の一人です。しかし私は、そのことを正直に、うちあけることができません。なぜなら、ほかの六人の男たちは、みんな、その男より身分も高く、物持ちであり、勢力もありますから、それを知ったら、きつと、そねんで、どんなしかえしを、するかしれません。私はいつそ、二人で、山のあちらへにげていこうと思いましたが、くまや、おおかみのいる森や、谷を奥深くはいらなければなりませんので、食ひ殺されることなしに、ぶじいけると思いません。神さま、どうしたら、私ども二人は、安全にゆくすえ長く添いとげられますか、あなたのお力で、おすくいくださいまし。」と、しばらく、頭を地にすりつけていたのです。

やがて、秋の取り入れがすむと、村の祝い祭りが、社の境内で、もよおされました。彼女はこの日、七人の男たちから受けた七面の鏡を、ひもでとおして、首にかけておどるのでした。神のお告げをまつて、どの一人にか、きめなければなりません。

くわしいわけを知った身寄りのものたちは、なにか、かわったことが起こらなければいいかと、しんぱいしました。ちようど、社の上の空には、入り日をあびて、雲の色がまっかに見えました。

「どうぞ神さま、用のない鏡は、みんな、くだいてください。そして、ただ一面だけを、私に永久にさずけたまえ。」と、となえながら、身を飛鳥のごとくひるがえして、上へ下へと、おどつたのでした。

社のまわりにともる、ろうそくの火が、鏡の面に、ちらちらとうつりかがやきました。

七人の男たちが、胸をいためてまつたかいもなく、彼女は、ふと病んで、まだ秋の木の葉がちる前に、あわただしく、この世から去つたのであります。

社の裏手の方へ、用水池がつくられたのは、この後、二百年くらいも、たつてからのことでした。そのうち、山の上にわく白雲が、海のほうへ流れていったとき、その姿を、いくたび、この水面にうつしたかしれません。

若い女のうずめられたところは、いつしか、古墳といわれるようになりました。そして、それからまた、幾百年の月日がたつたのであります。山や、川や、野原には、かくべつのかわりもなかつたけれど、町や村は、その時代によつて、ようすがちがい、人も馬も牛も、また幾代かの間に、たびたび生き死にしました。

丹塗りの社も、長い月日の雨風にさらされて、くちたり、こわれたりして、そのたびに、村人によつて建てかえられたけれど、まだわずかに、昔の面影だけは、のこつて

いました。しかし、古墳こふんのくわしい記録きろくなどは、もはや、どこにもこのつていませんでした。ただ遠い祖先そせんのものにちがいないが、いまの村人むらびとには、その造られた時代じだいすら、よくわからなかつたのです。

学者がくしやが、池いけのほとりに立つて、心こころありげに、よくあたりの景色けしきをながめていると、学者がくしやを案内あんないした役場やくばの若い書記しよきが、かたわらで、伝説でんせつめいたことを聞かせました。

「年寄りのいうことですが、なんでも静かな真昼まひるごろ、足音あしおとをたてずに、池いけへ近づくと、金銀きんぎんの二匹ひきのへびが、たわむれながら、水面すいめんを泳いで、お社のほうへ、上がっていくのを見るみことがあるといいます。もし、それを見たものは、近いうちに、きつとしあわせなことがあると、昔むかしからいうそうです。」と、語つたのであります。

だまつて、これを聞いた学者がくしやは、ほかに、こんな伝説でんせつがあるのか、うなずいていました。

「この古墳こふんを掘ほつてみたいのですが、どうか学問研究がくもんけんきゆうのため、ぜひゆるしてもらえますか。」と、そのとりはからいかたを、書記しよきにたのんだのでした。

「さあ、村長そんちやうさんや、神主かみぬしさんたちが、なんといわれますか、聞いてみなければわかりませんが、いつかも、そういう話はなしがあつたとき、たたりを恐おそれるからといって、だれ

も、手をつけなかったのです。」と、書記はいいました。

「私は、たぶん、なにか新しい発見ができるような気がするのです。」と、考古学者は、自分の考えをもらしました。

学者が学問のためにというので、書記も心をうごかせられたらしく、熱心に説きまわってくれます。そのかいあって、ついに村で発掘をゆるしました。

春びよりの、あたたかな日でした。畑の中の古墳のかたわらには、一本のかきの木がありました。小枝にのびた、つやつやしい若葉は、風にふかれて光っていました。そして、白い星のような花が、咲きかけていました。

ここへ集まつてきた村の若者たちが、土をほるため、くわをふるっていました。べつに、ひびきをたてるほどでなかったけれど、かきの花は、もろく枝をはなれて、ぽとりぽとりと、つめたい地へ落ちるのでした。

「花でも、葉でも、秋の末まで、まんぞくにのこっているのは、すくないものだな。」と、これを見て感じたものか、書記は木を見上げながら、いっしょにはたらく学校の教員ふうの男と、話をしていました。

土中深く、石をまわりに積んである棺が、掘りだされたのは、ようやく春の日の、か

たむくころでありました。

棺かんの中には、底そこにのこっている白骨はつこつと、不完全ふかんぜんな土器どきと、七つの鏡かがみなどがあつて、ひとびとひとびとの目めをひいたのでした。その死者ししやは、学者がくしやが、骨格こつかくから判断はんだんして、まだ若い女おんなであつたとわかりました。

鏡かがみは七面めんのうち、六つまで、さびきつて、ぼろぼろにくさつていたけれど、どうしたわけか、ただ一面めんだけ、くもつていられるけれど、なお、いくぶん光ひかりをたたえて、あかるみへ出すと、ものの影かげさえ、おぼろげにうつるのでした。

「どうして、この一面めんだけが、くさらなかつたろう？」

そのことが、みんなの、疑問ぎもんとなりました。

「おなじ、金属きんぞくで造つくられたであろうに、どうして、この一つだけが、くさらなかつたのでしょうか。」と、役場やくばの書記しよきは、学者がくしやにむかつてたずねました。このなぞは、たとえば、学者がくしやでも、すぐには、解とくことができなかったのです。

そして、いく日にちかの後のちでした。博士はかせは研究室けんきゆうしつの窓まどから、しばらくの間あいだに夏なつらしくなつた、外そとのけしきに見みとれていました。

ひでりつづきのため、白しろっぽく、かわいたアスファルトの道みちは、すこしの風かぜにも、ほこ

りをたてていました。そして、せわしげに歩いている人々の姿や、道ばたにならんでいるプラタナスの影が、ちらちらと道の上にうごくのが、なんとなく、わびしげにさえ見えるのでした。

研究室につとめている助手の小田さんは、また青年詩人でもありました。詩人なればこそ、幾世紀前の人間生活に興味をもち、心で美しく想像し、また、あこがれもしたのであります。

博士は、へやへはいつてきた小田さんに、こんどの旅行で見た北国や、いろいろ経験したことを、くわしく話しました。

たとえば、丹塗りの社があり、用水池があり、古墳はそこかたわらにあつたことや、伝説の話や、棺を掘つたときのありさまなど、当時のことを、思い出しながら語つたのであります。

助手の小田さんは、目をかがやかして、博士のいうことを聞いていました。

「ただ、ふしぎなことが一つあつた。それは、棺の中にあつた七面の鏡が、一枚だけくさらずに、いまも光っているが、あとは六つとも、さびて、ぼろぼろになつていたことだ。おなじ金で造つたのであろうが、それは、どうしたことだろうか。」

博士は首をかしげながら、かばんの中の、古鏡をとり出して、小田さんにしめしました。

「私はこのなぞを、どうしても学問のためにも、解かなければならない。」と、博士はつづけていいました。

「むかしは、鏡を女のたましいともいいましたから、これには、たましいが、はいっているのかもしれないね。」と、さすがに小田さんは、詩人らしい感想をもらして、うけとった鏡を、ていねいになでながら、しばらく、じっと見まもっていました。

「この金属を、分析してみなければ、わからぬことだ。おなじ金属でつくったものなら、この一つだけが、くさらぬというわけがあるまい。」と、博士は、科学者なら、空想を事実として、信ずるわけにいかないと、ひややかな調子で、助手に答えたのであります。

このとき、博士は、古墳の発掘をてつだってくれた役場の若い書記にしろ、学校の先生にしろ、話を聞いていると、みんな若い人たちは詩人であつて、物質だけをたよりにしていない、そのことは、いままでの学者たちとちがって、たましいのありかを知るといいういきかたで、考古学の将来に、明るい道が開けるような気がしたと、助

手の小田さんにむかつていったのでした。

その翌日のことです。博士は研究室へ出かけて、旅行先で集めてきたいろいろの材料を、よくしらべて、配列するのをたのしみとしました。

「先生、おはようございます。やはり、あの鏡は、ふしぎであります。先生のおいでなされるのを待っていました。」と、昨夜は、研究室で宿直した小田さんは、博士の顔を見るや、とびつかんばかりに訴えたのでした。

「ふしぎなことつて、どんなことだね。」と、博士も、なんとなく、胸さわぎを感じました。

「まあ、こちらへいらして、ごらんください。」と、助手の小田さんは、先に立つて、博士を、しんとした、うすぐらい研究室へ案内しました。

そこには、大きなろうそくが、ともされていました。かげろうのうごくように、ろうそくの火は、下におかれた鏡のおもてを照らしていました。

博士は心をおちつけて、鏡をのぞくと、そこにあやしげな身なりをした、男女がならんで、おぼろげに浮き出ていました。

年とつた、この考古学者は、しばらく目を、鏡からそらさずに、沈黙していました

が、そのうち、うめくように、

「ああ、やはり女は、七人のうち、この鏡をくれた男だけを、深く愛していたとみえる。」と、はじめて、そのなぞが、解けたといわんばかりに、ひくい声でさげびました。

「先生、するとこの女は、貞操をまもりたいばかりに、だまって死をえらんだのですね。」と、小田さんが聞きました。

「たしかにそうだよ。死んでから、地下で二人は、永久の幸福をもとめて、約束をはたしたんだね。」と、博士は答えました。

「西洋流ですと、婚約の指輪をおくる風習がありますが、東洋は日本でも、昔から、女の心をうつすといつて、鏡をたいせつにしましたが、婚約にも用いられはしなかつたでしようか？」と、小田さんは、うたがいをもつらしく、ただしました。

「女が鏡を命のごとく、たつとんだのは、わかつているが、主として結婚してからのごとで、婚約に鏡をおくったかどうか、よくわからない。約束をおもんじた昔のことだから、たとえ鏡をつかつたとしても、ふしぎのないことだが、古い文献をしらべたら、もつと、おもしろい発見が、あるかもしれない。」と、博士は、答えながら、頭をかしげていました。

「できることなら、この鏡を、もとの墓所にうずめてやりたい。」と、いった若い助手のねがいを、考古学者である博士は、ついに許したのでした。

助手の小田さんが、鏡を新しい木箱におさめて、北国へ旅立ったのは、夏もなかばすぎた日のことで、烏帽子岳のいただきから、奇怪な姿をした入道雲が、平野を見おろしながら、海の方へと、むかつていくところでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「うずめられた鏡」金の星社

1954（昭和29）年6月

初出：「女学生の友」

1953（昭和28）年8月

※表題は底本では、「うずめられた鏡《かがみ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年9月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

うずめられた鏡

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>